

健苗育成から好スタートを！

1 適切な種子予措

作業環境を清潔にするとともに種子消毒と浸種の注意点を再確認して、ばか苗病対策を徹底します。また、種子伝染性病害についても防除を万全にしましょう。

【薬剤消毒・浸種】

- ・ 浸漬法による種子消毒時および浸種時の水温は、防除効果を安定させるため、10～15℃を確保できるように努めます。
- ・ 浸種開始から2日間は、水の交換はしません。浸種期間は浸種水温10℃で6～8日程度とし、種子消毒剤の安定した薬効を確保するため、水交換は2～3回とします。
- ・ 複数の品種や消毒方法の異なる種子を、同じ容器で同時に浸種・催芽をしません。
- ・ 浸種の水量は、種子容量の2倍程度（種籾1kg当たり水量3.5L）とします。

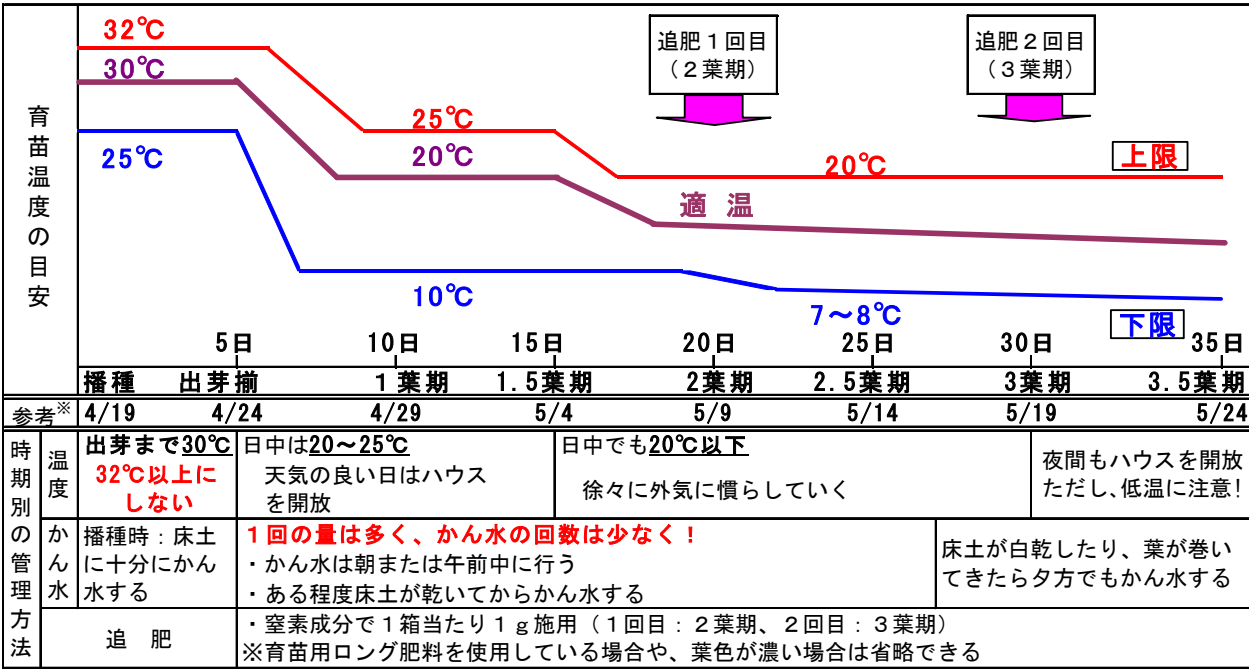
【環境衛生】

- ・ 周辺からの病原菌の侵入を防ぐため、種子予措を行う作業場所やその周辺を十分に清掃します。また、浸種・催芽時は容器にふたをします。
- ・ 種子予措に使用する容器等は使用前や品種、消毒方法が変わる毎に十分洗浄します。

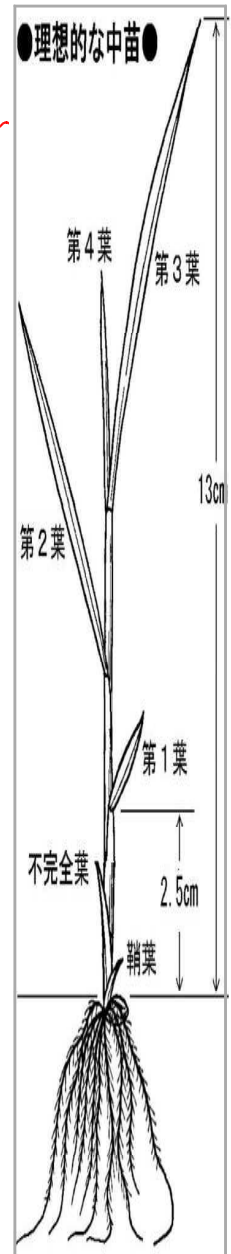
2 育苗期間の管理

出芽後の温度管理は、苗の生育や田植え時の苗質に大きく影響します。
また、育苗中の急激な温度変化は、病害や生育障害の発生を助長するので、苗の生育に応じた適正な温度管理に努めます。

【管理のポイント】中苗の場合 参考※は、平年の播種盛期を当てはめたもの。



- 出芽長は、0.5cm程度を目標とします。伸ばしすぎると、その後の葉数展開が遅れ、徒長気味の苗になるので注意します。
- 出芽揃い後は、速やかに被覆資材を除去します。出芽後の再被覆は、もみ枯細菌病等の発生を助長するため、行いません。
- 通気管理は通常1葉期頃から行い、1.5葉期以降は徐々に外気へ慣らします。移植1週間前頃からは、低温日でない限り夜間もハウスを開放して外気に当て、硬い苗に育てます。
- かん水はなるべく早朝に行い、1回のかん水量を多く、回数を少なくします。後半は苗が大きくなり箱内が乾きやすくなるので、床土が白く乾いたり、葉が巻き始めた場合にはかん水します。
- 追肥を行う場合は、窒素成分で箱当たり1g（2葉期と3葉期頃）施用します。追肥した後は、かん水して苗に付着した肥料を洗い流します（注：ロング入り肥料の場合は追肥不要です）。



〈実寸大〉

3 いもち病の防除対策

いもち病の発生は育苗施設からの発病・感染苗の本田への持ち込みが主な要因です。**育苗ハウス及びその周辺の稲わら・籾殻を撤去し、苗いもち防除と葉いもち防除を適正に行うこと**で、いもち病の被害を未然に防ぐことができます。

なお、タフブロックやエコホープDJ（生物農薬）を使用した場合は、生物農薬による種子消毒の効果が低下するため、ベンレート水和剤の播種時処理は行いません

○育苗期防除剤(苗いもち防除)

薬剤名	処理時期	希釈倍数	散布量
ベンレート水和剤	播種時～播種7日後頃 (かん注)	500倍	500ml/箱
		1,000倍	1,000ml/箱
ビームゾル	緑化始期(かん注)	500倍	500ml/箱

4 苗立枯病の防除対策

- 耕種的防除対策として、清潔な資材を使用するなど、育苗施設の衛生を保ち、栽培基準に基づいた適切な温度管理と水管理を行います。
- 苗立枯病菌は数種あり、種類によって防除薬剤が異なるため注意してください。
- リゾース菌に対しては、発芽後の薬剤防除は効果が劣るので、ハウス内の高温に注意し、ベタ張りを長期間行わないようにしてください。

リゾース菌	フザリウム菌	ピシウム菌	トリコデルマ菌	リゾクトニア菌
種籾層に白い綿毛のようなカビ	籾を中心 に白色～ 淡紅色の カビ	地際部が 褐色で水 浸状となっ ている	かさぶた 状のカビ	クモの巣 状の菌糸
根は短く、先端は膨らんでいる	根も褐変	地際部にカビは認められない	根は短く数も少ない	白色～淡褐色の小さい菌核

チェック ●適正な水管理を行うため、畦畔をしっかりと補修しましょう！
●農作業事故に注意！（春の農作業安全運動 4月20日～5月31日）

問い合わせはJA、または農業振興普及課まで
HPは「北秋田 コメ通信」で **検索** ～次回発行は5月中旬予定～